七世紀後半の「唐・吐蕃戦争」と東部ユーラシア諸国の自立への動き

――新羅の朝鮮半島統一・突厥の復興・契丹の反乱・渤海の建国との関連性――

菅沼愛語
菅沼秀夫

はじめに

本稿では、六七〇年～六九〇年代の唐をとりまく東部ユーラシアの情勢を研究の対象とする。この時期は、新羅・突厥・渤海といった唐の周辺諸族が相次いで自立しており、それ故、先行研究の幾つかにおいては唐の羈縻支配が破綻した時期と位置づけている。[1] 一方、周辺諸国の視点からこの時期を見ると、新羅は朝鮮半島を初めて統一し、チベット初の統一王朝吐蕃は政治と軍事に目覚しい発展を遂げ、突厥が再興し、渤海（震国）が建国されるなど、いずれも顕著な歴史的発展を遂げている。つまり、七世紀後半という時期は、多くの周辺諸族にとって国家創成という重要な時期に相当していた。

これら周辺地域の自立の動きが見られた六七〇年代～六九〇年代、西方では吐蕃が西域に対して積極的に進出してきており、唐は西域の支配権を巡って吐蕃との間で激しい争奪戦を繰り広げている。唐代は東西交流が特に活発であり、西域は東西交易路の拠点として経済的に重要であった。戦いは、吐蕃の宰相家であるガル一族の主導の下に、六七〇年から六九六年まで四半世紀に亘って波状的かつ継続的に行なわれ、戦争目的（西域の覇権）と戦争主体（唐と吐蕃）が同一であることから、本稿では、この戦いを一連の事象と見なし、この時期の唐・吐蕃間の戦いを「七世紀後半の唐・吐蕃戦争」と総称することにする。

唐は、この「七世紀後半の唐・吐蕃戦争」において四度の大敗（六七〇年、六七八年、六八九年、六九六年）を喫している。本稿では、この戦争を三つに区切り、六七〇年四月の吐蕃による安西都護府奪取から同年七月～八月の唐軍の大敗までを「第一次唐・吐蕃戦争」、六七七年の吐蕃による安西都護府奪取から翌六七八年九月の唐軍の大敗までを「第二次唐・吐蕃戦争」、六八七年の吐蕃による安西都護府奪取から六九六年三月の唐軍の大敗までを「第三次唐・吐蕃戦争」と呼ぶことにする。これらはいずれも西域の覇権という同一の戦争目的の下に為され、全期間を通じて戦闘や緊張状態は継続しているので、大きな枠組みで見れば同一の事象である。それでも、一次と二次、二次と三次の間には、約十年の間、唐・吐蕃間で大規模な会戦は行なわれ

ていないことから、この様な区分を採用した。尚、第三次については、唐の二度の大敗（六八九年と六九六年）の間に、武周革命による混乱と一定の休戦期間があることから前期と後期に分けた。尚、武周革命に関しては、一定の断続性はあるものの、本稿で論じる外交・外征の点においては比較的強い連続性が見られるので、この期間も唐王朝の一部とみなし唐の名称を用いる。

筆者は、この七世紀後半の唐・吐蕃戦争と周辺諸族の自立活動とを照合し、第一次唐・吐蕃戦争で唐軍が大敗した翌年に「唐・新羅戦争が勃発」し、第二次唐・吐蕃戦争で唐軍が大敗した翌年に「突厥遺民の反乱が勃発」し、第三次唐・吐蕃戦争で唐軍が大敗した二ヵ月後に「契丹の反乱が勃発」している点に着目し研究を始め、唐・吐蕃戦争と周辺諸国の自立への動きとの間の関連について更に深く調べ整理し考察を加えた。

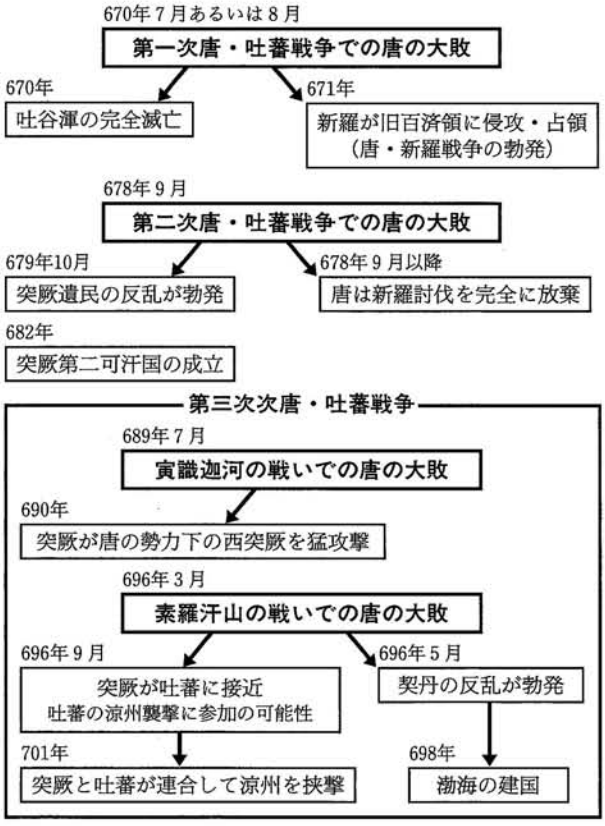
尚、七世紀後半の唐の外交関係において吐蕃が果たした寄与については、陳寅恪・古畑徹・張広達・黄約瑟・佐藤長・森安孝夫・ベックウィズ・内藤みどり・王小甫諸氏が先行研究において指摘しているので、これら先行研究について以下にまとめておく。

陳寅恪氏は『唐代政治史述論稿』下篇「外族盛衰之連環性及外患与内政之関係」において、唐代の周辺諸族が、唐との接触を通じて相互に連環性を有していたと推論し、その例として、高句麗滅亡後、朝鮮半島も含めた東北アジアに対して唐が消極政策に転じた最大の要因は吐蕃の強盛にあり、その危急によって唐の東北経営は無力化されたと指摘した。[2] 一方、日本では古畑徹氏が、「七世紀末から八世紀初にかけての新羅・唐関係」（『朝鮮学報』一〇七、一九八三年）において、対吐蕃戦の敗北により唐が新羅討伐を断念した事を『資治通鑑』等の史料を根拠に実証的に論考した。その後、中国では、張広達氏が『中国大百科全書・民族』（中国大百科全書出版社、一九八六年、四二六頁）で「高宗と則天武后の時代、唐は吐蕃と激闘し、軍事力を西北に投入していた。これが突厥の復興に機会を提供した」と述べている。[3] 黄約瑟氏は「武則天与朝鮮半島政局」（『黄約瑟隋唐史論集』中華書局、一九九七年）において、東西両戦線で活躍した将軍の分析等を通じて陳氏の説を補強した。王小甫氏は「総論隋唐五代東北亜政治関係大勢」（『盛唐時代与東北亜政局』上海辞書出版社、二〇〇三年）第二章「唐代周辺盛衰連環」において先行研究を総括し、更に、第三章「契丹倔強及其歴史影響」で「（契丹の反乱が勃発した）万歳通天元年（六九六）、武周朝廷は吐蕃と突厥の両面作戦に当たっており、腹背に敵を受けていた」と述べて、契丹の反乱が起こった当時の唐（武周政権）が、吐蕃・突厥の二大強敵を相手に苦戦していた事を指摘した。吐蕃サイドからは、佐藤長氏、森安孝夫氏、ベックウィズ氏などがチベット語史料も用いて吐蕃と西突厥の連繋を指摘し、内藤みどり氏、王小甫氏もそれについて論考している。[4]

これらの先行研究はいずれも重要な提言を含む卓越した研究である。とは言え、その多くは幾分個別的であり、諸国間の関係も含めた全体像は、未だ多くが明らかにはなっていないと思われる。この現状について、例えば、金子修一氏は『隋唐の国際秩序と東アジア』（名著刊行会、二〇〇一年、一二四頁）の「東アジア諸国をめぐる問題と視点」という項目において、陳寅恪氏の高句麗と吐蕃の連環性の学説を紹介しつつ、その指摘が「一部の例外を除いてその後の研究にあまり

生かされてなかった」と総括し、その方向での更なる考察の必要性を示唆している。

本稿では、「七世紀後半の唐・吐蕃戦争」での唐の度重なる大敗と、周辺諸国の自立と連繋への動きについて、史料等に基づき先行研究を織り込む形で、その全体像の把握を目指した。具体的には、史料等から関連する諸事象を抽出・整理し、時系列を明確にすると同時に、戦争の規模や唐軍の敗北の規模、周辺諸国の動向や唐の外交姿勢の微妙な変化など、かなり具体的なレベルまで検証・考察を推し進めた。加えて、論考の対象を空間的に拡げ、東アジアから中央アジアまでの東部ユーラシアという広範な領域にわたる動向を調べまとめた。その点については、例えば、筆者が作成した〔年表1〕〔年表2〕を見て頂きたい。(5)



「七世紀後半の唐・吐蕃戦争」と「唐の周辺諸国の自立への動き」との相関図

第一章　唐・吐蕃戦争以前の唐をとりまく国際情勢

本章では、六七〇年（咸亨元）に勃発する「唐・吐蕃戦争」の背景として、それ以前の唐をとりまく国際情勢を概観する。大まかには、七世紀の唐は建国より、北方（東西突厥）、東方（高句麗・朝鮮半島）、西方（吐蕃・西域）の順に最も重要な辺境が移行していったようである。北方の大国突厥の存在は、建国時の唐の存続に関わるものであり、それへの対応が唐初の最重要課題であった。北方平定後は、東方に隣接する強国高句麗と朝鮮の支配が主要課題となった。西方の吐蕃への対応は、西域などの経済的利権とも深く関わり重要ではあったが、吐蕃が新興国ということもあり、概して北方と東方の平定が優先され、唐は吐蕃に対しては当初宥和政策で臨んだ。以下では、まず突厥と高句麗への唐の対応を簡単にまとめ、次いで六六〇年代の吐蕃の動向と朝鮮の情勢について論じることにする。

突厥第一可汗国は、トルコ民族が樹立した最初の巨大国家であり、東西アジアを繋ぐ広大な地域を最大版図とする強大な帝国であった。隋の離間策により東西に分裂（五八三年）した後も、東突厥は建国期の唐をも臣下とし、強盛を誇っていたが、六三〇年（貞観四）、唐の太宗によって滅ぼされ、突厥遺民は唐の羈縻支配下に服することとなった。更に、唐は六五七年（顯慶二）に西突厥を滅ぼし、西突厥の統治方法に則してその

故地を東西に分け、二人の傀儡可汗（正統可汗の末裔に当たる阿史那彌射と阿史那歩真）を擁立した。[6] それと同時に、亀茲に安西都護府を置き、亀茲・疏勒・焉耆・于闐に安西四鎮を設置して安西都護府を援護する支配体制を敷いた。[7] また、青海の吐谷渾にも、太宗時代から親唐の傀儡政権を擁立していた。[8]

高句麗は、隋の文帝・煬帝、唐の太宗らの数度の大軍を撃退した強国であった。隣接する強国の存在は唐の安全保障上大きな問題であり、北方平定後の六六〇年代は、この隋以来の宿願であった高句麗討滅に向けて、唐が軍事と外交のかなりの部分を朝鮮半島に傾注した時期であった。唐は半島内で孤立していた新羅と連合し、高句麗の同盟者百済を先に攻め滅して（六六〇年）高句麗を孤立させた後、内紛に乗じて王都平壌を陥落させて、六六八年（総章元）、遂に高句麗を滅ぼした。高句麗の故地には安東都護府を設置し、二万の駐屯軍を置いて羈縻支配の下に置いた。[9]

しかし唐が百済・高句麗に対して大軍を動員している隙に、西方では吐蕃が西域と青海に侵攻し、唐の西域支配に対して次第に圧力をかけてきた。七世紀初頭にチベット高原を統一した吐蕃は、六三四年（貞観八）、初めて唐に入貢し、六四一年（貞観十五）には文成公主が降嫁して唐と親善関係を築いたが、六六〇年頃から積極的な対外進出に転じ、六六三年（龍朔三）に隣接する吐谷渾を滅ぼし、六六五年（麟徳二）には于闐を掌握するなど、唐の支配下にあった西域に対しても侵攻し始めた。

この当時、吐蕃を主導していたのは宰相のガル・トンツェン（禄東賛）であった。トンツェンは、初代吐蕃王ソンツェン・ガンポの頃より、吐蕃の軍制を確立し、[10] 太宗に二度謁見して[11] 文成公主の降嫁を実現させるなど、非常に功のある大臣であり、六四九年にマンソン・マンツェン王が年少で即位して以降は、王に代わって吐蕃の政治・軍事・外交を掌握していた。[12] 西突厥や吐谷渾内部に燻ぶる反唐勢力の救援要請を利用しては西域と青海に兵を繰り出し、領土拡張を試みた。トンツェンの死去（六六七年）後も、吐蕃の対外膨張策は彼の長男ツェンニャ（賛悉若）と次男ロンチンリン（論欽陵）によって継承され、巧みな戦術と外交により、六七〇年以降の唐・吐蕃戦争において唐は相当に苦戦を強いられる事となる。

六六二年（龍朔二）、吐蕃は、弓月（西突厥の一部族）と連合して亀茲・疏勒を攻撃した。これに対し、唐は蘇海政を派遣した。蘇海政は副官級の武将であったが、[13] 六六一年から高句麗遠征を行なっていた唐は、第一級の将軍達を東方戦線に投入していた為、西方には二級クラスの将を派遣したと思われる。蘇海政は、西突厥の二人の傀儡可汗（彌射と歩真）に援軍を仰いだ際、彌射の領土を狙っていた歩真の讒言を信じて彌射を殺害してしまい、彌射の部衆の蜂起という事態を招いた。西突厥での無用の鎮圧戦により蘇海政の唐軍は疲弊し、結局、吐蕃に対して軍資金を賂として渡して和睦し撤退した。[14] この唐の失策により、西突厥の唐への不信感は増大し、[15] 吐蕃に対しても「唐は組みし易し」という侮りの念を抱かせてしまった可能性もある。

六六三年五月、吐蕃は、吐谷渾の反唐勢力に誘導されてこれを滅ぼし、吐谷渾の地を併呑した。唐の傀儡であった吐谷渾王の慕容諾曷鉢は涼州に逃亡し、唐は直ちに涼州と鄯州に軍隊を集結させて吐蕃に備え、六月、蘇定方（西突厥と百済を滅ぼした名将）を安集大使として

派遣した。[16] 同月、吐蕃も大臣を唐に派遣して交渉に当たらせたが不首尾に終わった。その後、六六五年正月、吐蕃は既に占領していた吐谷渾の地（赤水）の割譲を承認するよう唐に要求したが、高宗はこれを許さず、[17] 唐と吐蕃は対立を深めていった。和睦による領土獲得が困難であると判断した吐蕃は、武力行使による領土拡張を決意したと思われ、その後、吐蕃は西域等にも積極的に侵攻するようになる。六六五年、吐蕃は弓月・疏勒と連合し、于闐を攻略し掌握した。[18] 六六六年、高宗は、吐谷渾王であった諾曷鉢を青海王に冊立し、[19] 唐は吐谷渾の傀儡政権を再興する意思を示した。六六七年、吐蕃は唐の支配下にあった生羌の十二州を奪取した。[20] 吐蕃の唐への対決姿勢は明瞭であったが、唐の対吐蕃政策は幾分複雑であった。事実、唐では高句麗滅亡の翌年（六六九年）九月、吐谷渾支援の為の吐蕃討伐が朝議に上った時、群臣の意見は三つに割れて廟議は定まらなかった。[21] 唐では吐蕃の侵攻を憂慮し、その動向を気にかけ警戒視する意見も出ていたが、この時点では、吐蕃討伐は実行に移されなかった。六六〇年代、唐の吐蕃への対応策が概して消極的であった理由は、この時期、高句麗討滅のため東方戦線に主戦力を集中しており、唐は、吐蕃に対して武力行使などの本格的な対応をとる事ができなかった事にあろう。

一方、東方においては、高句麗滅亡前後、唐の同盟者であった新羅が、反唐に意識を転換しつつあった。半島内で孤立していた新羅は唐と連合することで百済・高句麗・日本と対立し交戦してきたが、百済滅亡後の六六三年、唐は新羅を鶏林大都督府となし、文武王を鶏林大都督に任じて、新羅をも羈縻支配の下に組み込んだ。同時に、唐は百済王子の扶餘隆を熊津都督に任命して百済遺民の安堵を任せ、六六四年（麟徳元）には、新羅が拒絶したにもかかわらず、高宗からの厳しい勅命という形で百済との盟約を強要し、新羅と百済の国境線を劃定した。[22] その地域での異民族勢力を分断的に統治して現地勢力の弱体化・傀儡化を図るのが、唐および中国の歴代王朝の周辺諸国に対する支配権確立の為の常套手段である。例えば唐は、六四〇年に吐谷渾、六四一年に吐蕃に各々公主を降嫁させているが、[23] その狙いは吐谷渾と吐蕃という現地勢力を二分し、牽制させることにあったと思われる。また、西突厥に対する二人の傀儡可汗の擁立についても、西突厥遺民を分断的に統御しようとする唐の意図が伺える。新羅と百済に対しても唐は同様の政策を進めたのであろうが、この唐の分断政策により、新羅は唐に対して脅威と反感を抱くに至った。高句麗が滅びた六六八年、新羅の方から、国交断絶していた日本に対して使者を派遣し友好関係の樹立を図っていること、六六九年、高句麗から四千余戸を率いて亡命してきた安舜（高句麗王の外孫で後に唐に叛旗を翻す）を受け入れ庇護したこと等[24]から判断しても、この時期に新羅が唐との戦争を決意していた[25]と推定できる。

第二章　第一次唐・吐蕃戦争（六七〇年）と唐・新羅戦争の関連性

本章では第一次唐・吐蕃戦争と「新羅の統一戦争」の連動性を史料に基づき具体的に論じていく。六七〇年（咸亨元）四月、吐蕃は唐の安西都護府のある亀茲を陥落させ、唐・吐蕃戦争が勃発した。唐は安西四鎮を廃止し[26]安西都護府を西州（高昌）に後退させ防御体制を整える一方、吐蕃に対しては、宥和政策から武力による強硬策へと方針を

転換し、薛仁貴を総帥、阿史那道真と郭待封を副将とする大規模な吐蕃討伐軍を即座に派遣した。

ここで筆者が注目した点は、唐が、吐蕃に攻撃された四月のうちに直ちに大規模な討伐軍を組織している事である。『冊府元亀』巻一一九・帝王部・選将一には「総章三年（六七〇）四月、薛仁貴を邏娑道行軍大総管となし（中略）五万の軍勢を統率させて吐蕃を攻撃させた」とある。これは、唐が吐蕃による安西都護府奪取を重大な事態と認識したという事を示している。

しかしながら、唐軍は、七月～八月頃[27]「大非川の戦い」において吐蕃軍と交戦し、大敗を喫してしまった。この大非川の会戦における唐軍の規模と大敗の状況について、簡単な考察も加えつつ、諸史料を以下に要約する。

・唐軍の規模は、史料によって五万（『冊府元亀』巻一一九）とも十餘万（『旧唐書』巻一九六吐蕃伝、『新唐書』巻二一六吐蕃伝）とも言われている。いずれにせよ本格的な大軍であった。

・主将薛仁貴と副将郭待封の不仲が原因で、唐側は軍を二つに分けて進軍した。吐蕃軍の司令官ロンチンリン（論欽陵）は唐側の隙に巧みに乗じ、各個撃破で唐軍を大破した（『冊府元亀』巻四五六・将帥部・不和、『旧唐書』巻八三・薛仁貴伝）。

・唐軍は大敗し、死傷者は数知れぬ程であった（『資治通鑑』巻二〇一）。

・三将軍は戦線離脱して辛うじて戦死を免れたが、敗戦の責任を問われ、みな官位を剝奪されて庶人に落とされた（『資治通鑑』巻二〇一、『旧唐書』薛仁貴伝）。

・大非川での唐軍の敗北は、『冊府元亀』巻四四三・将帥部・敗衂三に敗戦記録として記されている。『冊府元亀』将帥部・敗衂には、主として大きな敗北ばかりが記されているので、大非川の戦いも唐にとって大敗であったと考えられる。

・『冊府元亀』巻一〇〇〇・外臣部・亡滅によれば、唐軍が大非川で大敗したことにより吐谷渾は完全に滅亡した。

以上から、唐が本格的に組織して派遣した軍勢が、吐蕃軍に惨敗を喫したことがわかる。敗戦後の閏九月、唐側では姜恪が涼州道行軍大総管に任命されて吐蕃討伐のために出撃している。しかしこの部隊は二年間、吐蕃と戦うことなく、司令官姜恪の病死をもって一戦も交えることなく帰還している[28]。つまり大非川での大敗後、唐はしばらくの期間、吐蕃に対して目立った攻勢をかけられなかった。

敗戦後、吐谷渾の故地は完全に吐蕃に吸収された。これにより、六六三年以前の様に吐谷渾に親唐の傀儡政権を擁立し吐蕃を東方から牽制するという唐の戦略は破綻した。それと同時に、この大敗は、唐の周辺地域の情勢を大きく変える契機にもなったと考えられる。

例えば、西方で唐軍が吐蕃軍に大敗した六七〇年には、東の朝鮮半島においても高句麗遺民の反乱が勃発し、新羅の唐に対する敵対行為も明瞭となるなど、唐の東西の辺境で紛争の連動性が見られる。この東西両戦線の動きについては、例えば、『資治通鑑』巻二〇一・咸亨元年（六七〇）条から読み取ることができる。

四月、吐蕃が西域十八州を陥とした。また、干闐とともに亀茲の撥換城を襲って陥落させたので、唐は亀茲・干闐・焉耆・疏勒の安西四鎮を罷めた。辛亥の日、右威衛大将軍の薛仁貴を邏娑道行

軍大総管となし、左衛員外大将軍の阿史那道真、左衛将軍の郭待封を副将となして吐蕃を討たせ、吐谷渾を支援して故地に帰還させようとした。（中略）高句麗の酋長・鉗牟岑が叛き、高蔵（高句麗の宝蔵王）の外孫安舜を推戴して主となした。高宗は、左監門大将軍の高侃を東州道行軍総官に任命して安舜を討たせた。安舜は鉗牟岑を殺し、新羅に逃げた。（中略）八月、（中略）薛仁貴は軍を退いて大非川に駐屯していたが、吐蕃の宰相論欽陵が兵四〇余万を率いて襲撃してきた。唐軍は大敗し、死傷者は数知れなかった。

ここで筆者が注目した点は、吐蕃討伐軍の総司令官をつとめた薛仁貴が、太宗期と高宗期に高句麗遠征で活躍した将軍であり、安東都護であったという点である。[29] 副将の郭待封も六六六年～六六八年の高句麗遠征に副将として従軍し、水軍を率いて平壌を攻略している。[30] つまり、吐蕃討伐軍の主将と副将はともに高句麗遠征の前線将軍であった。それまでは高句麗が唐にとっての主たる強敵だったので、唐の精鋭部隊は東方戦線に集中していたと思われる。東方戦線が高句麗の滅亡により一応終息したので、唐はこの軍勢を対吐蕃戦に投入し、事態を速やかに収拾しようとしたのであろう。しかし、薛仁貴を中心とする東方戦線の軍団が西方に移ったことにより、東方の防備が手薄になってしまった可能性が高い。薛仁貴が西方に赴いた途端、同じ四月に高句麗の酋長鉗牟岑が、新羅に亡命中だった安舜（宝蔵王の外孫）を盟主に担ぎ上げて叛旗を翻した。唐への反抗を期していたであろう高句麗遺民と、乱の煽動者であり唐の表面上の同盟者でもある新羅は、唐軍の動向に関する情報は敏感に察知していたと思われ、その機を捉えての蜂起とも考えられる。この高句麗遺民の反乱に対して、唐は高侃を主将とする討伐軍を派遣し鉗牟岑を撃破した。[31]

唐の対吐蕃戦での大敗の翌六七一年正月、新羅も、百済の旧都泗沘城目指して進軍を開始し、七月頃には泗沘城を占領して所夫里州を設置した。[32] 百済・高句麗相手の戦いで恒常的に臨戦態勢にあった新羅は、軍隊の動員も行軍も迅速であったと思われる。百済討滅前後の戦いにおいて新羅は唐と連合して百済領内を進撃した経験もあるので、[33] 百済旧都への進軍路は熟知していた。また、強力な反乱分子は既に掃滅済みなので、素早い進軍が可能であったと考えられる。旧百済領制圧戦は、軍事的にも地理的にも新羅に有利に展開していった。状況から判断すると、唐軍の西方への移動と六七〇年の大非川における唐軍の大敗が、六七一年の新羅による旧百済領進撃の引き金となった可能性も推測される。

第三章　第二次唐・吐蕃戦争と「唐・新羅戦争の終結」及び「突厥の復興」の関連性

本章では第二次唐・吐蕃戦争（六七七年～六七八年九月）を史料に基づいて概観し、この西方での戦いと「唐・新羅戦争の終結」及び「突厥の反乱と復興」について考察する。

（一）第二次唐・吐蕃戦争までの情勢

唐は六七〇年の第一次唐・吐蕃戦争での敗北と朝鮮半島の動乱によって、東西両面作戦を取らざるを得なくなった。まず東方戦線での対応策を見ると、唐は、百済・高句麗の討滅戦で活躍した劉仁軌や李謹

行[34]を派遣して高句麗遺民の反乱鎮圧と新羅討伐を試みると同時に、新羅の文武王より官爵を剝奪し、文武王の弟で、長安に滞在中だった金仁問を新羅王に冊立した。六七五年（上元二）、唐が新羅を各方面で撃破すると、窮した文武王は唐に遣使入貢して高宗に謝罪したので、高宗はこれを許して文武王の官爵を元に戻した。その翌年、唐は安東都護府を遼東城（遼寧省遼陽）、熊津都督府を建安城（遼寧省蓋県）に各々移転させ、拠点を半島から内地へと移した。[35]しかし、唐は、この時点では半島支配を断念した訳ではなかったと筆者は推測する。事実、六七七年（儀鳳二）、唐は高句麗最後の王である高蔵を遼東都督・朝鮮郡王に、百済王子の扶餘隆を熊津都督・帯方郡王に各々任じ、[36]安東都護府も、半島と遼東を結ぶ結節点であり、唐の支配拠点としてより適地であると思われる新城（遼寧省撫順）に移転している。この様に、この時期、唐は直接的な軍事行動に訴えるのではなく、軍事的圧力を維持しつつ政略で朝鮮半島を勢力下に組み込もうと画策したと考えられる。特に、旧主を擁立しての故地の奪還の試みは滅亡後の吐谷渾においても為され、また、旧主を傀儡とする間接支配は西突厥においても行なわれており、これらは当時の唐の周辺地域に対する攻略・支配の基本方策と捉えることができる。

西方戦線では、大非川で大敗した翌年、唐は西突厥の阿史那都支を匐延都督に任命し、吐蕃による西域侵攻を阻止するための措置を講じた。[37]また、唐は六七三年から六七五年にかけて、吐蕃の同盟者である弓月や疏勒王・于闐王・亀茲王に対して軍事的・外交的圧力をかけることによって四鎮を回復した。[38]四鎮が唐に帰順した背景には、吐蕃軍の撤退も影響しているという見方もある。[39]一方、吐蕃は六七五年正月に唐に遣使して和を請うたが、高宗は許さなかった。[40]唐との和睦が難しいと分かると、吐蕃は、軍事・外交の双方から戦争準備に取りかかったと考えられる。兄である宰相のツェンニャが外交戦略を展開し、弟で「大非川の戦い」で唐軍を撃破した将軍のロンチンリンが軍事作戦を策定した。六七五年と六七六年の二回、宰相のツェンニャ自らが西突厥に赴いているが、ツェンニャは阿史那都支と会談し、同盟を締結したと考えられている。六七六年、吐蕃王マンソン・マンツェンが死去した。[41]王には二人の遺児がいたが、宰相ツェンニャは長男のチ＝ドゥーソンを新王に推戴した。[42]前宰相ガル・トンツェンの頃からガル家が吐蕃の政治・軍事・外交を掌握し、長年マンソン王が政治の中枢にいなかった事を考えると、王の死によって吐蕃の国策が変更される事はなかったと思われる。新王チ＝ドゥーソンは八歳であり、ガル家にとっては、むしろ政策を実行し易くなったとも言える。

（二）第二次唐吐蕃戦争の勃発と六七八年九月「青海付近の戦い」における唐軍の大敗

六七六年、ロンチンリン率いる吐蕃軍は唐に対する軍事行動を再開し、翌年にかけて鄯州・廓州（以上青海省）・河州・芳州・畳州・扶州（以上甘粛省）を攻撃[43]し、六七七年には吐蕃軍と西突厥の阿史那都支の連合軍が安西都護府を襲撃した。[44]これによって第二次唐・吐蕃戦争が勃発する。

唐は、六七七年（儀鳳二）から六七八年（儀鳳三）にかけて、軍鎮の設置[45]による辺境防備の強化と大規模な募兵による大討伐軍の編成を行ない、吐蕃との戦いに備えた。即ち、六七七年、吐蕃との国境地帯

に当たる隴右と河西に、積石軍・莫門軍・河源軍の三つの軍鎮を置いた。[46] 筆者が注目した点は、唐が、東方戦線より、新羅軍を撃破して文武王を謝罪に追い込んだ李謹行と劉仁軌を召還し、六七六年頃に李謹行、六七七年に劉仁軌を各々対吐蕃戦に投入している点である。[47] これは、第一次唐・吐蕃戦争の際に、東方戦線で活躍した薛仁貴を召還して吐蕃討伐に投入したのと同様の措置であり、唐が再び東方の軍事力を西方に移したと考える。六七七年十二月には関内と河東で猛士を募兵した。六七八年正月、高宗は吐蕃討伐軍の総帥を劉仁軌から中書令の李敬玄に代え、総大将交代を機に、四川・雲南方面から吐蕃を側面攻撃するよう剣南・山南の兵も増発し、河南・河北の猛士も募集して兵力を増強した。[48] この為、吐蕃討伐軍の総兵力は十八万となった。

唐が繰り出した吐蕃討伐軍は、六七八年七月、鄯州近くの龍支で吐蕃軍を撃破した。高宗は喜び、戦勝の余勢を駆って新羅討伐も考えるが、侍中の張文瓘が「二正面戦争の危険性」を指摘して高宗に新羅征伐を思い止まらせた。この諫言の直後の六七八年九月丙寅の日、李敬玄率いる吐蕃討伐軍が、「青海付近の戦い」において吐蕃の将ロンチンリンと激戦の末、大敗した（『資治通鑑』巻二〇二・儀鳳三年七月～九月条）。唐軍の敗戦がいかに甚大であったのか、諸史料に基づいて以下にまとめてみる。

・唐側の前軍をつとめた、工部尚書で右衛大将軍の劉審禮は、敵陣に深入りしすぎて捕虜となった。主将の李敬玄は狼狽し、遁走した。黒歯常之が決死の兵五百を率いて吐蕃陣営に夜襲をかけ、吐蕃側の猛攻を削いだので、李敬玄は辛うじて敗残兵を取りまとめ鄯州に逃げ帰ることができた。（『資治通鑑』巻二〇二・儀鳳三年九月丙寅条、『旧唐書』巻一九六・吐蕃伝、『新唐書』巻二一六・吐蕃伝、『旧唐書』巻八一・李敬玄伝）。

・六七八年九月の青海付近における唐軍の敗北も、『冊府元亀』巻四四三・将帥部・敗衂三（大敗の記録）に敗戦記録として記されているので、唐の大敗であったと言える。

・敗戦を知った高宗が侍臣に吐蕃対策を下問したところ、辺防を固め、吐蕃遠征はしないのが上策、との意見であった。（『旧唐書』吐蕃伝、『旧唐書』巻五・高宗紀）。

二正面作戦ではなく、一極集中で対吐蕃戦に力を注いだにもかかわらず、唐は大敗したのである。しかも、東方からの兵力に加えて、更なる募兵によって強化した十八万の大軍の大敗は、唐の威信を揺るがす事態であり、周辺諸国にも多大な影響を与えたと思われる。

（三）唐による新羅討伐の完全放棄

本節では第二次唐・吐蕃戦争での唐軍の大敗と「唐・新羅戦争の終結」との関係に着目する。これについては、古畑徹氏が、従来あまり注目されていなかった『資治通鑑』巻二〇二・儀鳳三年（六七八）九月条より「張文瓘の諫言」を提示し、「唐と吐蕃との戦い」と「唐による新羅討伐の放棄」の関連性を実証的に論考している。[49] 即ち、六七八年九月、新羅遠征を行なおうとした高宗に対して、侍中の張文瓘が「いま唐は吐蕃と対戦中であり、征西に加えて東征も行なうことになれば東西ともに戦線拡大することとなり、唐は疲弊を免れない」[50]と反対し、吐蕃との戦いを理由に新羅征伐計画を中止させている。

第二次唐・吐蕃戦争の直前まで、唐は、安東都護府による軍事圧力

の下、高句麗・百済の旧主達を担いでの外交戦略を進めていた事、高宗が対吐蕃戦での大敗直前に新羅討伐を考えていた事、吐蕃との「二正面作戦を避ける」為に止む無く新羅征伐を思い止まったこと等から、唐が吐蕃に勝利し西方戦線が終息した場合には、唐による朝鮮半島への軍事的侵攻も充分にあり得たと思われる。しかし、「六七八年九月の唐軍の対吐蕃戦での大敗」によって唐は軍事的な余裕を失い、新羅討伐を完全に放棄せざるを得ない状況になった。それは結果的に、その後の半島情勢の安定化と新羅の支配の長期化をもたらした。これ以後、朝鮮半島全域が国家の単位となり、中華世界の影響を受けつつも一線を画し、独自の歴史を歩むこととなる。

（四）突厥遺民による三度の反乱と突厥の復興（六七九～六八二年）

本節では、第二次唐・吐蕃戦争での唐の大敗と、その一年後に起きた「突厥遺民の反乱」および最終的な「突厥の復興」について考察する。突厥は、第一可汗国の後裔である東突厥が滅亡した（六三〇年）後、唐の単于都護府に服していたが、六七九年（調露元）十月に蜂起[51]し、二度の失敗を経て六八二年に第二可汗国を樹立した。突厥復興の背景について、岩佐精一郎氏、護雅夫氏は、高宗末から則天武后初めの唐朝内部の事情に帰し[52]、張広達氏は、対吐蕃戦のための西方への兵力投入が契機になったと異なった指摘をしている。

これら先行研究では「突厥の復興」の要因を一括して簡単に論じているが、突厥遺民の反乱のうち最初の二回は高宗が存命中の出来事であり、高宗の崩御が重なる最後の反乱とでは唐朝の状況が大きく異なっている。そこで、筆者は、「突厥遺民の乱勃発」には唐の対外的な軍事的要因が、「突厥独立の成功」には唐の内政面の混乱が、それぞれ主たる要因であるとする複合的な見方が妥当であると考える。つまり、「突厥遺民の最初の反乱」（六七九年十月）に関しては、その前年の「六七八年九月の対吐蕃戦での唐軍の大敗」が、反乱の四ヶ月前の「唐の将軍裴行倹の西方への出撃」等とあわせて、武装蜂起の契機を与え、その三年後、三度目の反乱（六八二年）の帰結としての「最終的な突厥の独立の成功」に関しては、同時期に顕在化した「唐内部の混乱（高宗の崩御・武后による中宗の廃位・李敬業の乱）」が決定的な要因になったと考える。特に、対吐蕃戦の大敗は唐の対外支配の綻びを露呈する形となり、唐内の突厥遺民に自立の機運を与え、蜂起に繋がった事は充分に有り得る。六七九年六月、唐の名将裴行倹が西方に出撃した事[53]も一因かも知れない。

その後、単于都護府が鎮圧に着手したが、突厥遺民はこの討伐軍を撃破した。勝利に勢いづいた突厥軍は、契丹も煽動して営州（遼寧省朝陽）を襲撃したが、唐軍に撃破された。突厥は、唐の北東地域への反乱の拡大を試みたと思われる。この後、唐は、西方より帰還した裴行倹に本格的な討伐軍（総勢三十餘万）を委ねて派遣し、突厥遺民の乱を鎮圧した。唐軍が撤退すると遺民達は再蜂起したが、裴行倹による再度の突厥討伐によって二度目の反乱も鎮定された。しかし、六八二年（永淳元）、阿史那骨咄禄（第一可汗国最後の頡利可汗の子孫）が三度目の反乱を起こし、これに対しても唐は討伐を計画したが、高宗の崩御（六八三年十二月）や李敬業の乱（六八四年九月）等により中止を余儀なくされた[54]。この様な唐朝中枢部の混乱により、突厥遺民への本格的な討伐は行なわれず、その結果、骨咄禄の復興突厥は独立

を保ち得た。

（五）唐による四鎮回復と吐蕃の動向

六七九年、裴行倹は、吐蕃と連合して安西都護府を襲撃した西突厥の阿史那都支を捕縛し、四鎮を回復すると、西突厥の要衝砕葉に新たに城塞を築かせ、西突厥への支配の強化と、西突厥と吐蕃の連繋の遮断を試みた。六八二年二月、西突厥の阿史那車薄が反乱を起こしたが、四月には鎮圧された。この時期、吐蕃では六七八年から六八〇年（永隆元）にかけて新王即位に絡む政争が起こり、宰相のツェンニャが政敵を失脚させている。この為、内訌を抱えていた吐蕃は唐の四鎮奪還に対しても反撃しなかったと考えられている。[55] 吐蕃は内紛終息後の六八〇年以降、四川方面と青海方面から攻勢をかけ、六八〇年、安戎城（吐蕃防御の為に茂州の西南に建設）を奪取したので、雲南の諸蛮はみな吐蕃に降服した。だが、青海戦線では六七七年に唐が設置した軍鎮が防波堤としての機能を果たした為もあり、唐側は吐蕃軍の攻撃を食い止めている。[56] この様に、六八〇年以後も、局地的には一進一退の攻防戦は続いていたが、唐・吐蕃間には大規模な戦闘は行なわれなかった。

第四章　第三次唐・吐蕃戦争（六八七年～六九六年三月）

本章では、第三次唐・吐蕃戦争を、突厥・西突厥の動向も含めて考察する。尚、この戦争の前後では、第一次・第二次以上に、国際的・外交的な側面が顕著になってくる。

（一）前半期（主たる戦闘期間は、六八七年～六八九年七月）

四鎮奪還を果たした唐は、西突厥に対する吐蕃の侵攻を阻止する為、支配者不在であった西突厥に対し、再度、二人の傀儡可汗を擁立した。六八五年（垂拱元）、阿史那彌射の息子元慶に西突厥東部、翌六八六年（垂拱二）、阿史那歩真の息子斛瑟羅に西突厥西部を統轄させた。一方、吐蕃では六八五年、宰相のツェンニャが死去し、弟で、再三唐軍を撃破した名将のロンチンリンが宰相位を継承した。新宰相ロンチンリンは父兄以来の対外膨張策を推進し、西域に対しても軍事行動を再開した。六八七年（垂拱三）吐蕃が、焉耆と亀茲を攻め落とし、四鎮をみたび奪い取ると、[57] これによって第三次唐・吐蕃戦争が勃発した。則天武后は六八八年（垂拱四）、自身に対抗して起こった「越王の乱」を鎮圧し残る唐室諸王も粛清した後、韋待價を主将とする三六総管からなる大規模な吐蕃討伐軍を編成し西域へ派遣したが、六八九年七月「寅識迦河の戦い」（弓月の西南）において吐蕃軍に大敗を喫してしまった。『資治通鑑』巻二〇四・永昌元年七月条より戦いの様相を以下に抜粋する。

・韋待價率いる唐の大軍は、吐蕃軍に大敗した。唐軍は敗戦後、兵士に凍死者・餓死者が続出し、死者が夥しい数にのぼったため、韋待價は帰還した。

・韋待價は除名の上、流刑に処され、副将の閻温古も斬罪に処された。

・敗戦後、安西副都護の唐休璟が敗残兵を取りまとめ、西域（西州以東）を安堵した。

大敗した唐は、翌年の武周革命を挟んで三年間は、吐蕃に対して大規

模な反撃は行なわず、[58]主として、安西都護府を西州に撤退させて守りを固めさせるに留まった。

筆者は、第三次唐・吐蕃戦争における復興突厥の動向と連動性についても着目した。第三次唐・吐蕃戦争が勃発した頃、突厥第二可汗国の阿史那骨咄禄は、六八七年（垂拱三）十月以後、もしくは六八八（垂拱四）より、西突厥への攻撃を開始している。唐が西突厥の東部に擁立した傀儡可汗の阿史那元慶は、吐蕃軍に破れ捕虜となった後、唐に逃げ帰っており、[59]その地域での既存勢力の空白を見て、突厥は西突厥への攻略に着手したと思われる。突厥に対して、唐は六八九年に二度、討伐軍を派遣しているが、突厥軍を捕捉できず目立った戦果を挙げることはできなかった。更に、対吐蕃戦での唐の大敗後、六九〇年（天授元）突厥の骨咄禄は大規模な征西を行ない、唐の傀儡政権である西突厥西部の阿史那斛瑟羅を攻撃した[60]ので、斛瑟羅は耐えられず唐に逃走した。骨咄禄が西突厥遠征に着手した背景には、六八七年の吐蕃による安西四鎮奪取と六八九年七月の「寅識迦河の戦い」による唐の西方での軍事拠点の喪失と軍事力の減衰が直接に影響しており、唐の大敗を好機と見て突厥は西突厥に猛攻撃を加えたと考えられる。突厥第二可汗国は主として東突厥（第一可汗国）の故地を勢力圏としていたので、その地域での支配が固まった後は、唐の傀儡化した西突厥を併合し、かつての大帝国を再興しようと試みたのであろう。吐蕃に加えて突厥も西域争奪戦に加わった場合、唐の西域支配にとって非常に深刻な事態となる恐れもあったが、六九一年（天授二）に突厥可汗の骨咄禄が死去した為に、突厥は西突厥征服戦を続行することができず、唐にとっての危機的状況は回避された。

（二）後半期（主たる戦闘期間は、六九二年十月～六九六年三月）

六八九年に「寅識迦河の戦い」に敗北した唐は、武周革命の後、対吐蕃戦に着手した。唐はその際、吐蕃の戦闘方法や情勢に通暁していた王孝傑を用いた。王孝傑は六七八年の対吐蕃戦大敗の際に捕虜となりラサに連行されたが、幼い吐蕃王チ＝ドゥーソンが亡き父に似ていると泣き出した為、助命厚遇され、長期の吐蕃滞在の後に唐への帰還も許された。六九二年（長寿元）の二月と六月に、吐蕃から唐への亡命者（党項万餘人・吐蕃の酋長昝捶・羌蛮八千餘人）が相次ぎ[61]、吐蕃国内に政情不安が見られた。それを好機と捉えたのであろうが、西州都督の唐休璟は四鎮奪回作戦を立案し、王孝傑と作戦を実行に移した[62]。

六九二年十月、唐軍は西方に進撃し、吐蕃軍を大破して吐蕃から四鎮を奪還するとともに、安西都護府を亀茲に前進させ、駐屯軍三万を置いて防御を固めた[63]。これに対して吐蕃は、四鎮奪還の為に、西突厥の阿史那俀子と連合して唐への反撃を試みた。俀子は、唐が西突厥の傀儡可汗に擁立した阿史那元慶の長男であったが、唐が元慶を処刑したので、父の仇を報じるため叛旗を翻し吐蕃と組んだのである。吐蕃軍は、宰相ロンチンリンの末弟であるグントンを指揮官として、西突厥の反唐勢力の協力を得つつ、六九四年（延載元）二月、唐と大規模な戦闘を行なったが敗北してしまった[64]。

吐蕃に二度勝利した唐は、北方の突厥に対しても攻勢に転じた。即ち、六九四年臘月に霊州（寧夏回族自治区）に入寇していた突厥に対して、三月、十八将軍からなる大討伐軍を差し向けた。突厥可汗の默啜は撤退したが、唐は容赦せず次の大遠征軍を強化組織したので、默啜も抵抗を断念し、六九五年（天冊万歳元）十月、遣使朝貢して唐に

降服した。[65]

一方、六九二年と六九四年の二度も唐に敗北し西域を失った吐蕃では、宰相ロンチンリンが自ら反撃を試み、六九五年七月、青海の臨洮に侵攻した。宰相不在の六九五年の冬、前年の敗戦の責任を問われ、指揮官であったグントン（宰相の末弟）が、吐蕃王チ＝ドゥーソンの命により処刑されるという事件が起きた。[66] 即位時八歳であったチ＝ドゥーソンも既に二七歳となり親政を望み、国政を支配する宰相家を憎み始めていた。国内外からの圧力を受け、ロンチンリンは、唐に勝利する他に活路は無い状況になっていた。

宰相ロンチンリンの率いる吐蕃軍は、青海方面からの反撃を展開し、六九六年（万歳通天元）三月、青海付近での「素羅汗山の戦い」において唐軍を大敗させた。唐軍の敗北がどれほど深刻なものであったかを、史料から抽出し以下に要約する。

・王孝傑と婁師徳が率いる唐軍が、ロンチンリンとツェンワ兄弟の率いる吐蕃軍と素羅汗山で戦い、唐軍が大敗した（『資治通鑑』巻二〇五・万歳通天元年三月壬寅条、『冊府元亀』巻四四三・将帥部・敗衂三、『旧唐書』吐蕃伝、『新唐書』巻四・則天皇后紀）。

・王孝傑は敗戦の責任を問われて庶人に落とされ、婁師徳も降格処分に処されており、指揮官達はいずれも厳罰に処されている（『資治通鑑』巻二〇五、『旧唐書』巻九三・王孝傑伝、『旧唐書』巻九三・婁師徳伝）。

・素羅汗山における唐軍の敗北も、主として大敗のみを記す『冊府元亀』巻四四三・将帥部・敗衂三に、敗戦記録として記されている。

これらの史料からも、第三次唐・吐蕃戦争の最終決戦である「素羅汗山の戦い」において唐軍が惨敗したことがわかる。唐はこの大敗以降、西方において大規模な軍事的攻勢は行なっていない。むしろ謀略によって吐蕃の弱体化を画策するようになった。

尚、第三次唐・吐蕃戦争においては、吐蕃と西突厥が連合を組み、復興突厥も同時期に唐に入寇するなど、大局的には、唐と吐蕃の対立構造という大きな枠組みの下で、隣接する周辺諸族も大きく関与しており、外交関係の萌芽と戦争の国際化が見てとれる。この傾向は八世紀の東部ユーラシア情勢においてより一層顕在化してくる。

第五章　第三次唐・吐蕃戦争の周辺諸国への余波と唐の外交政策の転換

本章では、第三次唐・吐蕃戦争の最終決戦である六九六年三月の「素羅汗山の戦い」での唐の大敗を機に蠢動し始めた周辺地域（契丹・突厥・渤海）の動向について考察する。

（一）「契丹の反乱」（六九六年五月）

後に最初の征服王朝となる遼を建国し、東アジア史上重要な役割を果たすことになる契丹は、唐初は突厥に服属し、唐軍の高句麗遠征時の進軍路にも位置していた。唐にとっては、突厥・高句麗という二大強敵の征服の際、契丹の掌握は戦略上重要であった。それ故、太宗は突厥攻略の下準備として六二八年（貞観二）、契丹の酋長摩会を懐柔し、六四八年（貞観二二）には契丹の本拠地に松漠都督府を設置して契丹を唐の羈縻支配下に置いた。しかし、六九六年（万歳通天元）、

唐の苛政に対する不満から契丹は蜂起した。[67]「契丹の反乱」と「素羅汗山の戦い」については、『新唐書』則天皇后紀、『資治通鑑』巻二〇五・万歳通天元年（六九六）条に見られ、例えば『資治通鑑』では以下の様に記されている。

三月壬寅、王孝傑と婁師徳が率いる唐軍と、論欽陵と賛婆が率いる吐蕃軍が、素羅汗山で戦い、唐軍が大敗した。（中略）五月壬子、営州の契丹の松漠都督李尽忠と帰誠州刺史の孫万栄が挙兵して叛き、営州を攻め落として都督の趙文翽を殺害した。

この様に、契丹蜂起の二ヶ月前に「素羅汗山の戦い」で唐軍が吐蕃軍に大敗している。契丹は反乱の準備はしていたであろうが、西方での唐軍の大敗を知り、好機と見て反乱に踏み切った可能性もあるのではないかと筆者は考える。

「契丹の反乱」に対して唐は、六九六年五月、二八将軍を指揮官とする契丹討伐軍を派遣した。だが、この大討伐軍は八月には契丹軍によって撃破され、二将軍が契丹軍の捕虜となる程の惨敗を喫した。[68]一方、西方では九月、涼州（甘粛省）が吐蕃によって襲撃された。同じく九月、契丹を攻めあぐねる唐に対して突厥の黙啜も使節を派遣し、突厥降戸の返還を条件に契丹征伐を請け負う旨を申し出た。[69]三月、五月、八月、九月と東西両戦線で敗北続きだった唐は、黙啜に契丹討伐を命じた。突厥が背後から契丹を攻撃したので、契丹軍は壊滅的打撃を被り、首領の孫万栄も家僕に弑殺されて、翌六九七年（神功元）六月「契丹の乱」は鎮定された。敗北した契丹は以後、突厥に従属することになる。[70]

（二）突厥の勢力拡大

第三次唐・吐蕃戦争の前半で二度勝利（六九二年、六九四年）した唐が、六九四年三月、大討伐軍を繰り出してきたので、突厥は交戦を断念し六九五年十月に唐に降服した。しかし、翌年三月に「素羅汗山の戦い」で唐軍が大敗すると、突厥は唐に対して再び挑戦的な姿勢に転じていく。事実、六九七年正月には突厥は、唐の北辺（霊州・勝州）を襲撃している。[71]尚、六九六年九月、吐蕃が涼州を襲撃しているが、涼州の襲撃者に関しては、これを「吐蕃」と記すもの以外に「突厥」と記すものもあり、[72]また、五年後の七〇一年に吐蕃と突厥が連合して涼州を挟撃している事実[73]からも、六九六年三月の唐の大敗を機に突厥と吐蕃が接近し、半年後、突厥が吐蕃の涼州襲撃に参加した可能性もある。その一方で、突厥は強かに唐に恩を売って勢力拡大を目論み、涼州が襲撃された同じ九月、唐に向かって契丹討伐を申し出ている。東西両面で苦闘中だった唐は、突厥可汗の黙啜を遷善可汗に冊立し、契丹鎮定を委任した。突厥は契丹を攻略し、唐領であった契丹を従属下に置いた。契丹鎮圧後、突厥は唐に対し、助国討賊の報酬として穀種・繪帛等の下賜を強要し、その要求の全てを唐に呑ませた。この様に、第三次唐・吐蕃戦争における唐の敗北と、その直後の「契丹の反乱」を契機として突厥は急速に勢力を拡大し、契丹を勢力下に組み込み、以後、強盛を誇るようになった。

尚、突厥は六七九年の最初の蜂起の時、契丹を煽動して営州を襲撃しており、六九六年の契丹の反乱についても突厥が唆した可能性は充分にある。[74]その際、突厥が西方での唐の大敗を契丹に伝えて反乱を煽ったかも知れない。また、吐蕃は六六〇年代以降、弓月や西突厥と連

合しており、七〇一年以降は、吐蕃と突厥の連合も明確化している。こうした事実から、筆者は、吐蕃と西突厥や突厥・契丹の間で、情報の収集と送信といった周辺諸国間の情報ネットワークが七世紀末頃には形成されていたと推測する。

（三）渤海（震国）の建国（六九八年）

渤海は、六九六年の契丹の反乱を契機として、六九八年、粟末靺鞨族の大祚栄が、靺鞨族や高句麗遺民を従えて建国した。「契丹の反乱」と「渤海の建国」の関連性について『旧唐書』巻一九九・渤海靺鞨伝などの史書にも明記されており、[75] 従って、渤海の建国も第三次唐・吐蕃戦争からの連鎖的な出来事と位置づけてよいであろう。渤海は、唐と対立するという関係からも孤立化を避けるという点からも外交を重視し、同じ反唐の突厥・新羅・契丹と誼を通じた。突厥に対しては建国直後に通好し、新羅に対しても友好関係の樹立を試みた。また、契丹とも友好関係を維持したと考えられている。[76] その後、渤海は、突厥の配下として反唐勢力に加わり、八世紀の東アジア情勢にも影響を与えるようになる。

（四）「七世紀後半の唐・吐蕃戦争」の終息

「素羅汗山の戦い」に大勝した吐蕃の宰相ロンチンリンは、半年後の六九六年九月、唐に対し、「安西四鎮からの撤退」と「十姓（西突厥）の地の吐蕃への割譲」という法外な条件で和睦を提案してきた。[77] これに対して唐は、直接的な軍事行動ではなく謀略によって頽勢挽回をはかった。即ち、唐側の使者としてロンチンリンと会談した郭元振は、吐蕃側の弱点として、吐蕃王チ＝ドゥーソンが宰相家ガル一族を憎悪している事、吐蕃人が長期の戦争に倦み疲れている事等を看破し、内訌を煽るべく吐蕃に対して離間策をしかけたのである。唐の謀略は成功し、六九八年、ロンチンリンを含め、ガル一族は、チ＝ドゥーソンによって粛清された。[78] 六七〇年以降、戦争を主導していたガル一族が滅亡した事によって、四半世紀に及んだ「七世紀後半の唐・吐蕃戦争」にも終止符が打たれたのである。

（五）唐の外交政策・軍事への影響

七世紀後半の唐・吐蕃戦争は、当然の事ながら、唐の軍事・外交の方針にも多大な影響を与えている。第一章でも論考したように、六六〇年代、唐は東方の高句麗討滅を最優先事項として、西方の吐蕃問題については宥和政策とも言える消極策をとってきた。しかし、六六八年に高句麗が滅亡し、六七〇年に唐・吐蕃戦争が勃発した後は、「張文瓘の諫言」からも窺い知れるように、唐にとっての最重要戦線は東方から西方の対吐蕃へと移行した。軍制に関しても、例えば、六七七年頃に、吐蕃との国境地帯に幾つかの軍鎮が設置され、後に軍鎮を束ねる「節度使」が発生する素地を形成した。

対吐蕃戦争が本格化する以前の唐の周辺地域への支配形態としては、吐谷渾や滅亡後の西突厥・高句麗・百済で見られるように、旧主を擁立し傀儡政権を樹立すると共に、異民族勢力が一極集中しないよう分断的統治を試みていた。しかし、対吐蕃戦争での度重なる大敗は、唐の周辺地域への支配力の著しい低下を招くと共に、唐の外交に関する選択肢をも大きく制限した。その結果、相次いだ周辺諸族の自立に対

しても充分な対応がとれず、時には、その容認を余儀なくされ、八世紀には、周辺諸国の独立を認めつつ、それらを勢力下に引き入れる方向へと外交方針が転換していく。

おわりに

最後に、総括として本稿の結論と、その後の唐と周辺諸国の動向を簡単にまとめておく。

七世紀後半においては、東アジア・中央アジア・北アジア史上、「唐と吐蕃の一連の戦争」が重要な意味を有していた。唐が吐蕃との戦いに大敗すると、その度に周辺地域で自立を志向した様々な動きが起こっている。即ち、「七世紀後半の唐・吐蕃戦争」と、「新羅の朝鮮半島統一」、「突厥の反乱と復興」、「契丹の反乱」、「渤海の建国」には一定の関連性があったと考えられる。七世紀後半は、複数の周辺地域において覇権がどうなるか分からない流動的な国家創成期に対応しており、とりわけ朝鮮半島とチベットについては、その後の「地域の歴史」を規定する非常に重要な時期であった。一方、七世紀後半の唐は、西域を巡る対吐蕃戦の為、各方面への軍事的活動に大きな制約を受け、一度は掌握できた朝鮮半島と突厥、更には契丹をも喪失した。契丹は復興した突厥の勢力下に入り、朝鮮半島の北方に渤海の建国も許してしまった。唐は最終的には「西域の支配権」を守ったが、「失ったもの（＝朝鮮半島、突厥、契丹）」も大きかった。

八世紀前半になると、新羅・突厥・吐蕃などの周辺諸国は自立期から安定期へと移行し、「存続と発展」へと目が向いた結果、軍事に加えて外交が重要な要素になってくる。周辺諸国は、同盟し或いは唐と結ぶ事により、支配の安定化と繁栄を目指した。唐も七二〇年代～七三〇年代には叛いた諸国を承認し、巧みな外交戦略によって周辺諸国との関係を改善している。吐蕃牽制の為に突厥と親善関係を築き、[79] 渤海牽制の為には新羅との友好関係を利用し、東アジア・中央アジアの安全保障体制の構築を進めた。大局的には、唐の政策は、周辺諸国への直接的支配から、共存型の勢力圏の構築へと推移したと思われる。

この後の唐と吐蕃の関係であるが、七一〇年に金城公主が降嫁して唐・吐蕃間に平和が訪れた時期もあったが、公主の化粧料（河西九曲）が新たな紛争地と化して、再び唐・吐蕃間に戦争が勃発する。その後、安史の乱の際に唐が混乱した隙を衝いて、吐蕃は河西・隴右を奪取し、七六三年（広徳元）には長安を十五日間占領して皇帝の擁立まで行なった。[80] 吐蕃は安史の乱以降に本格的に歴史の表舞台に現れてくるが、本稿で論考した様に、七世紀後半の時点で吐蕃は既に唐にとっては難敵であり、唐との戦いを通して、広く周辺国家の歴史に対しても多大な影響を与えていたのである。

七世紀後半の東アジア・中央アジア・北アジアは相互に密接な影響を与えあっていた。唐および周辺諸国は絶えず直接的な交渉を持ち、地理的に遠く隔たった周辺諸国同士でも、唐とある地域での戦いの帰趨が、唐と他地域の関係に大きく影響するなど、唐との関係を媒介として、互いに強い相関を持ちつつ発展していた。即ち、東部ユーラシア地域全体が、主として唐との関係を通じて、有機的に連動していた時期であった。とりわけ、この時期の「唐・吐蕃戦争」は、中国周辺諸国の自立という観点からは、重要な歴史的意義を有していたと考えられる。本稿では、以上の点を、史料等に基づき、比較的客観的な事

実関係を抽出し年表等に整理した上で論考してきたが、それらは主として中国側の豊富な史料に拠った。当然の事ながら、その全体像を明らかにする上では、史料的な制約はあるものの、吐蕃・突厥・新羅・高句麗など、周辺諸国側の史料に基づく分析も必要であり、その意味で、本稿で呈示した東部ユーラシア諸国間の密接な関連性の考察は、その為の端緒に過ぎない。より広い視点で、ユーラシアの諸地域や諸事象の相関を明らかにし、ユーラシア史の全体像を構築していくという観点からは、個別史の枠を超えた、より広域的な歴史研究と総合化が、今後ますます必要になってくると思われる。

註

(1) 布目潮風・栗原益男『隋唐帝国』(講談社、一九九七年)、『世界歴史大系・中国史二・三国〜唐』(山川出版社、一九九六年)など。

(2) 陳寅恪『唐代政治史述論稿』(上海古籍出版社、一九九七年)一三〇頁、一三六頁、一四六頁。尚、初出は一九四四年。

(3) 王小甫『唐吐蕃大食政治関係史』(北京大学出版社、一九九二年、以後『唐吐蕃大食』と略す)八一頁。

(4) 佐藤長『古代チベット史研究』上(東洋史研究会、一九五八年、以後『古代チベット史』)、森安孝夫「吐蕃の中央アジア進出」(『金沢大学文学部論集・史学科篇』四、一九八四年、以後「吐蕃進出」)、Ch.I. Beckwith, *The Tibetan Empire in central Asia*, Princeton University Press, 1987. 内藤みどり『西突厥史の研究』(早稲田大学出版部、一九八八年、以後『西突厥史』と略す)、王小甫『唐吐蕃大食』。

(5) 年表および本文中の年月に関しては、当時の史料に従って陰暦で表してある。

(6) 内藤みどり『西突厥史』二六一頁。

(7) 伊瀬仙太郎『中国西域経営研究史』(巌南堂書店、一九六八年、以後『西域経営』)。

(8) 『旧唐書』巻一九八・吐谷渾伝、『新唐書』巻二二一・吐谷渾伝。

(9) 『旧唐書』巻一九九・高麗伝、『唐会要』巻七三・安東都護府、日野開三郎「唐の高句麗討滅と安東都護府」(『東洋史学論集・第八巻』三一書房、一九八四年)。

(10) 山口瑞鳳『吐蕃王国成立史研究』岩波書店、一九八三年、八六〇頁、九〇九頁。

(11) 二度目の入朝の時(六四六年)、トンツェンは、高句麗遠征より帰還した太宗(苦闘の末に病気も得たため退却)を祝賀しており(『旧唐書』『新唐書』吐蕃伝、『冊府元亀』巻九七〇・外臣部・朝貢三)、高句麗征伐に苦戦する唐を間近に見て、吐谷渾と西域への攻略まで視野に入れた可能性もある。

(12) 『旧唐書』吐蕃伝、『資治通鑑』巻一九九・永徽元年(六五〇)五月壬戌条。

(13) 『旧唐書』巻八三・蘇定方伝。

(14) この前後の事情については『資治通鑑』巻二〇一・龍朔二年十二月条、佐藤長『古代チベット史』三二〇頁、内藤みどり『西突厥史』二七二〜二七三頁を参照。

(15) 乾封年間(六六六〜六六八)に阿史那歩真が死去すると、西突厥の余衆は吐蕃に附した(『新唐書』巻二一五・突厥下(西突厥伝)、『資治通鑑』巻二〇一・龍朔二年十二月条)。

(16) 『資治通鑑』巻二〇一・龍朔三年六月戊申条。

(17) 『資治通鑑』巻二〇一・麟徳二年正月丁卯条。

(18) 『資治通鑑』巻二〇一・麟徳二年閏三月条、森安孝夫「吐蕃進出」八頁、六三頁の注四九、伊瀬仙太郎『西域経営』二四五頁。吐蕃の干闐攻略に疏勒が参加していることから、疏勒も六六五年以前に吐蕃の勢力圏に属していたと考えられている。

(19) 『冊府元亀』巻九六四・外臣部・封冊二。

(20) 『資治通鑑』巻二〇一・乾封二年(六六七)三月戊寅条。

(21) 『新唐書』吐蕃伝、『資治通鑑』巻二〇一・総章二年九月丁丑朔条、『冊府元亀』巻九九一・外臣部・備禦四。

(22) 『旧唐書』巻一九九・百済伝、新羅伝。『三国史記』新羅本紀七・文武王十一年七月条。その現代日本語訳は、井上秀雄訳注『三国史記』（以後、井上『三国史記』と略す）一、平凡社、一九八〇年、二一九頁。李成市「三国の成立と新羅・渤海」（『朝鮮史』山川出版社、二〇〇〇年）九二頁。

(23) 貞観十四年（六四〇）、吐谷渾に弘化公主、翌年、吐蕃に文成公主を降嫁させている。

(24) 井上秀雄「新羅統一王朝」（『東アジア世界における日本古代史講座』六、学生社、一九八二年）一二九頁、石井正敏『東アジア世界と古代の日本』（山川出版社、二〇〇三年）二〇頁。『三国史記』高句麗本紀十（井上『三国史記』二、平凡社、一九八三年、二六一頁）。

(25) 他にも、唐による新羅討伐の噂が流れた事（六六八年頃）、唐が新羅貴族に反乱を唆して新羅の内乱を画策した事（六六九年、六七〇年）等が、新羅の唐に対する反抗の契機であると考えられている。井上秀雄『古代朝鮮』（講談社、二〇〇四年）二二三～二二四頁。

(26) 干闐と疏勒は六六五年以降、吐蕃の勢力下に置かれていたので、この時、亀茲と焉耆が吐蕃に奪われたことで四鎮は実質的な機能を失い廃止されたと考えられている。伊瀬仙太郎『西域経営』二四四～二四五頁、森安孝夫「吐蕃進出」一〇～一一頁。

(27) 大非川の戦いが行なわれた時期については、『資治通鑑』『冊府元亀』では「八月」、『旧唐書』巻五・高宗紀、『新唐書』巻三・高宗紀では「七月」と記されている。

(28) 『旧唐書』高宗紀、『新唐書』吐蕃伝、『資治通鑑』巻二〇一・咸亨元年閏九月甲寅条。

(29) 『旧唐書』巻八三・薛仁貴伝、『新唐書』巻一一一・薛仁貴伝。(9)も参照されたい。尚、日野開三郎氏は「唐の高句麗討滅と安東都護府」（二八頁）で、安東都護府は六六九年（総章二）、遼東の新城（撫順）に移転していたと考察している。

(30) 郭待封は六六六年（乾封元）、積利道行軍総管に任命されて兵糧輸送を担当し、翌年の新城陥落後、水軍を率いて海路より平壌に進撃した（『新唐書』巻二二〇・高麗伝）。

(31) 『三国史記』新羅本紀六・文武王十年八月条（井上『三国史記』一、一九六頁）この後、安舜は鉗牟岑を殺して新羅に逃亡した。新羅は、安舜を高句麗王に冊立した。

(32) 『三国史記』新羅本紀七・文武王十一年条（井上『三国史記』一、二〇五頁・二二七頁）

(33) 『旧唐書』巻八四・劉仁軌伝、『三国史記』新羅本紀七・文武王十一年七月条（井上『三国史記』一、二一三～二一八頁）。

(34) 『冊府元亀』巻一一九・帝王部・選将一。

(35) この前後の事情は『旧唐書』（巻一九九）『新唐書』（巻二二〇）高麗伝、百済伝、『資治通鑑』巻二〇二・上元元年正月壬午条、上元二年二月条、儀鳳元年二月甲戌条、儀鳳二年二月丁巳条。安東都護府の変遷については日野開三郎「唐の高句麗討滅と安東都護府」。

(36) その後、高蔵は靺鞨と共謀して反乱を企てたので、唐は高蔵を邛州（四川省）に配流した。扶餘隆も、新羅が百済を制圧している様を見て恐怖し唐に逃げ帰ってきた。この様に旧主を傀儡として朝鮮半島を支配しようとする唐の試みは結局失敗した。

(37) 『資治通鑑』巻二〇二・咸亨二年四月甲申条、佐藤長『古代チベット史』三二七頁、内藤みどり『西突厥史』二七六頁。

(38) 六七三年、唐が弓月に討伐軍を派遣して威嚇すると、弓月は疏勒王と共に入朝し降服した（『資治通鑑』巻二〇二・咸亨四年十二月条）。六七四年には干闐王が自ら入朝して降服（『資治通鑑』巻二〇二・上元元年十二月戊子条）、六七五年には亀茲王が銀・馬等を唐に献じた（『旧唐書』高宗紀）。周辺都市の降服を考慮すると、これは亀茲の帰順とみなせる。

(39) 森安孝夫「吐蕃進出」一二～一三頁。

(40) 『資治通鑑』巻二〇二・上元二年正月辛未条。

(41) マンソン王の死因は不明であるが、四二歳という若さと、この前後でも吐蕃が活発に挑発的な軍事行動を続けている事から、王の死は予期された、病死であったと推測する。

(42) この前後の事情については、佐藤長『古代チベット史』三二八

〜三四一頁、森安孝夫「吐蕃進出」一三〜一四頁、内藤みどり『西突厥史』二七七〜二七八頁、王堯・陳践訳注『敦煌本吐蕃歴史文書』（民族出版社、一九九二年、以後『吐蕃文書』）を参照。

(43) 『資治通鑑』巻二〇二・儀鳳元年〜儀鳳二年条。

(44) 『新唐書』高宗紀、『旧唐書』巻八四・裴行俭伝、森安孝夫「吐蕃進出」一五頁。

(45) 儀鳳年間以降、唐は軍鎮を増設した。浜口重国「府兵制度より新兵制へ」（『秦漢隋唐史の研究』上、東京大学出版会、一九六六年）、日野開三郎「支那中世の軍閥」（『東洋史学論集・第一巻』三一書房、一九八〇年）。

(46) 菊池英夫「節度使制確立以前における「軍」制度の展開」（『東洋学報』四四・二、一九六一年）二一二頁。

(47) 『旧唐書』巻一九九・靺鞨伝、劉仁軌伝。尚、靺鞨伝によれば、李謹行は青海戦線において吐蕃の論欽陵を撃退した功績によって、上元三年（六七六）燕国公に封ぜられているので、李謹行が対吐蕃戦に投入された時期は六七六年頃と考えられる。また、この記述から、青海の吐蕃軍を指揮していたのがロンチンリンである事もわかる。

(48) 『冊府元亀』巻九九一・外臣部・備禦四、『唐大詔令集』巻一〇二・儀鳳二年十二月「求猛士詔」、『資治通鑑』巻二〇二・永隆元年七月条、儀鳳三年正月条。

(49) 古畑徹「七世紀末から八世紀初にかけての新羅・唐関係」一六〜二〇頁。

(50) 『旧唐書』巻八五・張文瓘伝、『新唐書』巻一一三・張文瓘伝。

(51) 『旧唐書』巻一九四・突厥伝、『新唐書』巻二一五・突厥伝、『資治通鑑』巻二〇二・調露元年十月条。

(52) 岩佐精一郎「突厥の復興に就いて」（『岩佐精一郎遺稿』東京、一九三六年）一〇六頁、護雅夫『古代遊牧帝国』（中公新書、一九七六年）一一五頁。

(53) 『新唐書』高宗紀、『資治通鑑』巻二〇二・調露元年六月。

(54) 『資治通鑑』巻二〇二・調露元年十月〜開耀元年条、永淳元年〜光宅元年条。

(55) この前後の事情に関しては、伊瀬仙太郎『西域経営』二五六頁、松田寿男『古代天山の歴史地理学的研究』（早稲田大学出版部、一九五六年）、佐藤長『古代チベット史』三三三頁〜三四二頁、森安孝夫「吐蕃進出」一五〜一六頁、六五頁注七六を参照。

(56) 『旧唐書』『新唐書』吐蕃伝、『資治通鑑』巻二〇二・永隆元年〜開耀元年。

(57) 『新唐書』突厥下（西突厥伝）、内藤みどり『西突厥史』二八八頁、佐藤長『古代チベット史』三四二頁〜三四四頁、森安孝夫「吐蕃進出」一六頁〜一七頁。

(58) 六九一年（天授二）五月、武后は岑長倩に吐蕃討伐を命じているが、出撃直後に召還しており実際の戦闘は無かった。この出撃命令は、皇太子擁立に反対した岑長倩への私怨と考えられる（『旧唐書』巻七〇・岑長倩伝、『資治通鑑』巻二〇四・天授二年五月条）。

(59) この前後の事情については、内藤みどり『西突厥史』二八八〜二九一頁、三一四頁。

(60) 『資治通鑑』巻二〇四・天授元年条。

(61) 『旧唐書』吐蕃伝、『資治通鑑』巻二〇五・長寿元年二月己亥条、六月条。

(62) 『旧唐書』巻九三・王孝傑伝、『冊府元亀』巻四〇五・将帥部・識略四。

(63) 『資治通鑑』巻二〇五・長寿元年十月条。

(64) 『資治通鑑』巻二〇五・延載元年二月条、内藤みどり『西突厥史』二九六頁。

(65) 『資治通鑑』巻二〇五・延載元年臘月甲戌〜三月甲申条、天冊万歳元年十月条。

(66) 佐藤長『古代チベット史』三五八〜三六二頁、王堯訳注『吐蕃文書』。

(67) 『旧唐書』巻一九九・契丹伝、『新唐書』巻二一九・契丹伝、田村実造『中国征服王朝の研究』上（東洋史研究会、一九六四年）。

(68) 『旧唐書』巻六・則天皇后紀、『資治通鑑』巻二〇五・万歳通天元

年五月〜八月条。

(69) 『旧唐書』『新唐書』突厥伝、『冊府元亀』巻九七三・外臣部・助国討伐、『資治通鑑』巻二〇五・万歳通天元年九月条。

(70) 『資治通鑑』巻二〇五・万歳通天元年九月〜巻二〇六・神功元年六月条。

(71) 『新唐書』則天皇后紀、突厥伝、『資治通鑑』巻二〇六・神功元年正月条。

(72) 涼州の襲撃を「吐蕃」であると記すのは『旧唐書』『新唐書』吐蕃伝、『新唐書』巻四・則天皇后紀など。「突厥」であると記すのは『資治通鑑』巻二〇五・万歳通天元年九月丁巳条、『旧唐書』巻五九・許欽明伝、『新唐書』巻九〇・許欽明伝。尚、王小甫氏は、『唐吐蕃大食』一三二頁において、吐蕃と東突厥が練兵して涼州を襲撃したと見なしている。

(73) 『文苑英華』巻九七二・行状・張説撰「兵部尚書代国公贈少保郭公行状」。

(74) 松井等氏（「契丹勃興史」『満鮮地理歴史研究報告』第一、一九一五年、一六二頁）、日野開三郎氏（「突厥黙啜可汗の興亡と小高句麗国」『東洋史学論集・第八巻』三一書房、一九八四年、一三三頁）も、突厥が契丹を唆して反乱を起こさせたと推察している。

(75) 『新唐書』巻二一九・渤海伝、濱田耕作『渤海国興亡史』（吉川弘文館、二〇〇〇年）。

(76) 濱田耕作『渤海国興亡史』一四頁、石井正敏『東アジア世界と古代の日本』二〇頁、古畑徹「唐渤紛争の展開と国際情勢」（『集刊東洋学』五五、一九八六年）二四頁。

(77) 『旧唐書』『新唐書』吐蕃伝、『資治通鑑』巻二〇五・万歳通天元年九月丁巳条。

(78) 『新唐書』吐蕃伝、『旧唐書』巻九七・郭元振伝、『資治通鑑』巻二〇五・万歳通天元年九月条、巻二〇六・聖暦二年四月条、佐藤長『古代チベット史』三六二〜三六九頁。

(79) 菅沼愛語「唐玄宗「御製御書」闕特勤碑文考―唐・突厥・吐蕃をめぐる外交関係の推移―」（『史窓』五八、二〇〇一年）三三四〜三三七頁、古畑徹「唐渤紛争の展開と国際情勢」二六〜二八頁、李成市「三国の成立と新羅・渤海」一〇〇頁。

(80) 佐藤長『古代チベット史研究』下巻（東洋史研究会、一九五九年）。

付記　狩野直禎名誉教授、小谷仲男教授、菅澤庸子氏より、有益な御意見を頂きました。深く感謝致します。

年　表　1

西暦・元号	西突厥	西域	吐蕃	吐谷渾	高句麗	百済	新羅
657-668	657　**唐、西突厥を滅ぼす** 662　唐、傀儡可汗を殺す	662 弓月と吐蕃、四鎮を襲撃 665 吐蕃、于闐を掌握	663.5　**吐蕃、吐谷渾を滅ぼす** 663.6　唐、吐谷渾問題で吐蕃と交渉		668.9　**高句麗滅亡** 668.12　平壌に安東都護府設置	660.8　**百済滅亡** 663.8　**白村江の戦い**	
670年 咸亨元年		4月　**吐蕃軍が亀茲にある唐の安西都護府を襲撃→「第一次唐・吐蕃戦争」の勃発**（唐の安西四鎮は全て吐蕃に奪われた為に廃止）4月　唐の高宗、**安東都護**の薛仁貴を、吐蕃討伐軍の総帥に任命 7月あるいは8月　**第一次唐・吐蕃戦争の決戦の「大非川の戦い」で、唐軍が吐蕃軍に大敗**		唐が吐蕃に大敗した為、吐谷渾の故地回復は失敗 → **吐谷渾の完全滅亡**	4月　**安東都護の薛仁貴が、吐蕃討伐軍の総帥に任命される** 4月　**高句麗遺民の乱が勃発**：高句麗の鉗牟岑が安舜（高句麗王の外孫）を奉じて蜂起 唐は、高侃に安舜を討たせる。安舜は鉗牟岑を殺して新羅に逃走 8月　新羅、安舜を高句麗王に封じる		
671年 咸亨二年	4月　西突厥の阿史那都支を匐延都督に任命：**唐の西突厥支配**（兼・対吐蕃防御）				**新羅が百済の旧都を占拠し、百済の故地を奪取** **→「唐・新羅戦争」の勃発** 7月　唐の将軍 高侃が、高句麗遺民の反乱軍を撃破		
673年 咸亨四年		唐は弓月討伐軍を派遣。12月　弓月は疏勒王と共に唐に降服。 これにより**唐は安西四鎮のうち疏勒を回復**			閏5月　唐の将軍 李謹行が、高句麗遺民の反乱軍を撃破。 高句麗の敗残兵の多くが新羅に逃亡		
674年 上元元年		12月　于闐王が唐に降服し、**唐は安西四鎮のうち于闐を回復**（翌年、亀茲王が銀・馬等を唐に献上。676年頃迄に**唐は安西四鎮を全て回復**）			**唐の高宗、新羅の文武王から官爵を削り、長安にいた王弟の金仁問を新羅王として冊立**		
675年 上元二年	吐蕃の宰相ツェンニャが西突厥に赴く	正月 吐蕃が唐に遣使朝貢して和を請うが、唐の高宗は許さず			2月　唐の将軍 劉仁軌と李謹行が**新羅軍を相次ぎ撃破。新羅の文武王が唐に遣使入貢して謝罪し、高宗は文武王を許し王の官爵を元に戻す**		
676年 儀鳳元年	吐蕃王マンソン・マンツェンが死去。 吐蕃軍、唐の鄯州・廓州・河州・芳州・疊州（青海・甘粛方面）を攻撃。 吐蕃のツェンニャ、再び西突厥に赴く（阿史那都支と会談し同盟を結んだ可能性あり）				2月　唐の安東都護府、遼東城に移転、 唐の熊津都督府、建安城に移転		
677年 儀鳳二年	**吐蕃と西突厥の阿史那都支が連合し、亀茲の安西都護府を襲撃 →「第二次唐・吐蕃戦争」の勃発** この頃、吐蕃への備えとして、隴右と河西に、**積石軍・莫門軍・河源軍の三つの軍鎮を設置** 12月　唐、「猛士」を募兵し 吐蕃討伐軍を組織（翌月にも「猛士」を募兵）				2月　唐の安東都護府、新城に移転。 唐は、高句麗王の高蔵を遼東都督・朝鮮郡王に封じて高句麗遺民を、百済王子の扶餘隆を熊津都督・帯方郡王に封じて百済遺民を、夫々 統治させようとするが、共に失敗		
678年 儀鳳三年	9月　**第二次唐・吐蕃戦争の決戦である** **「青海付近の戦い」において、李敬玄率いる唐軍が、吐蕃軍に大敗**				唐は、吐蕃との大敗後は、新羅討伐を完全に断念したと思われる		

年　表　2

西暦・年号	西突厥	吐蕃	唐	突厥
679年 調露元年	7月　唐の将軍 裴行倹が 西突厥の阿史那都支を捕縛。その後、**唐は 四鎮を奪還**（焉耆に代えて碎葉を四鎮とする）		6月　唐の将軍 裴行倹が西方に出撃	10月　**突厥遺民の第一次反乱**：突厥遺民が蜂起するが、唐軍により反乱は鎮圧される
682年	阿史那車薄が叛くが、唐軍が直ちに鎮定	吐蕃が、唐の拓州・松州・翼州に入寇		**阿史那骨咄禄が蜂起 → 突厥第二可汗国成立**
683年			12月　**高宗が崩御し、中宗が即位**	3月　阿史那骨咄禄が唐の**単于都護府を攻撃**
684年 光宅元年			2月　**武后が中宗を廃し、睿宗即位** 9月　**李敬業の乱が勃発**	
685-686 垂拱元年 垂拱二年	**唐は、傀儡可汗を擁立し、西突厥を支配させる**（685年 阿史那元慶を東部の可汗、686年阿史那斛瑟羅を西部の可汗に擁立）	685　**宰相のツェンニャが死去。**ツェンニャの弟**ロンチンリンが宰相となる**（吐蕃は再び活動的になる）	685　垂拱律令公布 686　武后、密告制度を設け、反対派を粛清	
687年	この頃、唐の傀儡可汗の阿史那元慶が、「賊」の襲撃を受け、その後 唐に逃げ帰る（吐蕃の襲撃を受けたと解釈される）	**吐蕃軍が四鎮を唐より奪い取る →「第三次唐・吐蕃戦争」の勃発**		687年10月　骨咄禄の中国北辺への最後の入寇。この頃より、**骨咄禄が 西突厥に侵攻を開始**
688年			8月　越王の乱（唐室諸王の粛清）	
689年		7月　**第三次唐・吐蕃戦争 前半の決戦「寅識迦河の戦い」で唐軍が大敗**		5月と9月　唐、突厥討伐軍を派遣
690年 天授元年	**西突厥への突厥の大攻勢**：突厥の猛攻により西突厥の傀儡可汗・斛瑟羅は唐に亡命		9月　**則天武后が即位（武周革命）**	**突厥の可汗・阿史那骨咄禄が西突厥を大攻勢**
691年		5月　唐、吐蕃討伐軍を派遣するが、出撃直後に召還。実際の戦闘は無し		
692年	唐が 阿史那元慶を処刑	10月　**唐軍が吐蕃軍を撃破し四鎮を奪還**		
694年 延載元年	この頃、元慶の長男　**阿史那俀子が、西突厥での反唐勢力となり、吐蕃とも連合**			臘月　突厥の新可汗・黙啜が、霊州に初入寇 3月　**唐は18将軍からなる突厥討伐軍を派遣**
	2月　**唐軍が、吐蕃軍と西突厥・阿史那俀子の連合軍を撃破**（唐、吐蕃撃破後、突厥にも攻勢をかける）			
695年	7月　吐蕃軍が青海の臨洮に入寇。冬 宰相末弟のグントン処刑			10月　突厥の可汗・**黙啜が唐に降服**
696年 万歳通天 元年	3月　**第三次唐・吐蕃戦争の最終決戦である「素羅汗山の戦い」において唐軍がロンチンリン率いる吐蕃軍に大敗**			
			5月　**「契丹の反乱」が勃発。**　8月　**唐の契丹討伐軍が契丹軍に敗北**	
	9月　吐蕃軍が、唐の涼州を襲撃。　突厥軍も吐蕃の涼州襲撃に参加した可能性あり			
	9月　吐蕃の宰相ロンチンリンが、唐に 法外な条件で和睦を提案（以後、唐は謀略により吐蕃の弱体化をはかり、698年 **吐蕃王により、ロンチンリンら宰相家のガルー族が粛清される**）			9月　**突厥の黙啜、唐に遣使し「契丹討伐」の任を請け負う**（突厥は、翌年 契丹を撃破し、その後は 契丹を従属下に置く）